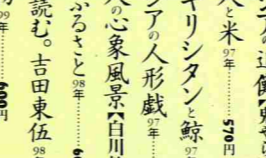
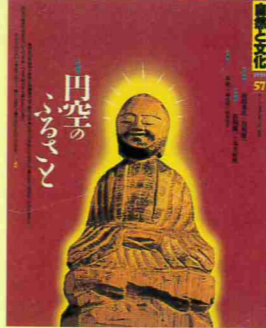


自然と文化 バックナンバー

- 1 渚と日本人 83年夏 品切
- 2 東京論 83年秋 品切
- 3 蔵の文化 84年新春 品切
- 4 風 84年春 品切
- 5 橋 84年夏 品切
- 6 妖怪 84年秋 品切
- 7 白と黒 85年新春 品切
- 8 月と潮 85年春 品切
- 9 かぶつ 85年夏 600円
- 10 巨人と小人 85年秋 600円
- 11 眼の力 86年新春 500円
- 12 カミの観念 86年春 品切
- 13 地方の都市空間 86年夏 品切
- 14 音霊 86年秋 品切
- 15 アジアの仮面芸能 87年新春 品切
- 16 異人と妖怪 87年春 品切
- 17 都市の路地空間 87年夏 600円
- 18 中世の回路 87年秋 品切
- 19 変身変化 88年新春 500円
- 20 環シナ海文化と九州 88年春 品切
- 21 古代祭祀時空 88年夏 550円
- 22 小さな神々 88年秋 500円
- 23 辺境を歩いた人々 89年新春 550円
- 24 雲南貴州と古代日本のルーツ 89年春 550円
- 25 動物の霊力 89年夏 570円
- 26 草薙神 89年秋 570円
- 27 名所「シ空間」の構造 90年新春 570円
- 28 歌枕「空想の天地」 90年春 570円
- 29 アジアの歌垣 90年夏 570円
- 30 中世居館 90年秋 570円
- 31 カミ殺し 91年新春 600円
- 32 イモ文化再考 91年春 550円
- 33 柱のダイナミズム 91年夏 600円
- 34 東シナ海を巡る日韓比較民俗 91年秋 570円
- 35 幻覚都市 92年新春 570円
- 36 東アジアの風水思想 92年春 品切
- 37 儀礼と生命原理 中国西南少数民族の祭祀 92年夏 570円
- 38 出羽三山と山岳信仰 92年秋 570円
- 39 アジア海道「漂海民をめぐって」 93年新春 570円
- 40 南島文学の発生と伝承「文学とシヤーマニス」 93年春 570円
- 41 小集落の地名地名発生と共同幻想 93年夏 570円
- 42 東アジアの網引 93年秋 570円
- 43 台湾の祭祀儀礼醮とふり 94年新春 570円
- 44 動物の精霊・自然 94年春 570円
- 45 日本海をとりまく歌と踊り 94年夏 570円
- 46 笹森儀助の探検と発見 94年秋 570円
- 47 芸道の花「世阿弥と現代能」 95年新春 570円
- 48 鎮魂の思想史「南島文学の発生から」 95年春 570円
- 49 神人のにぎわい「ムタタシヤのシヤーマニス」 95年夏 570円
- 50 東アジアの虎文化 95年秋 570円
- 51 四方十川の原風景 96年春 570円
- 52 東アジアの追儺「鬼やしこ」 96年夏 570円
- 53 日本人と米 97年春 570円
- 54 隠れキリシタンと鯨 97年夏 570円
- 55 東アジアの人形戯 97年秋 600円
- 56 古代人の心象風景「白川静の世界」 98年新春 600円
- 57 円空のふるさと 98年春 600円
- 58 風土を読む。吉田東伍 98年夏 600円
- 59 見世物 99年秋 600円



- 主な取扱い書店……【東京】八重洲ブックセンター……【渋谷】大盛堂書店6階・紀伊国屋書店・国学院大生協……【新宿】紀伊国屋書店5階……【池袋】西武ブックセンター・芳林堂書店……
- 【神保町】岩波ブックサービスセンター……三省堂書店……東京堂書店……書肆アクセス……【六本木】青山ブックセンター……【西荻窪】ナワラサード・信愛書店……【名古屋】名古屋……三省堂書店……ちくま正文堂……三州足助屋敷……
- 【京都】メテオショップ・ファンテックセンター……シユンク堂……【大阪】紀伊国屋書店梅田・千里文化財団・民博売店……旭屋書店梅田……【神戸】シユンク堂・コーベックス……【沖縄】じのん
- 年間定期購読料……一般読者 2,520円 財団会員 2,220円 ●問い合わせ……「財」日本ナショナルトラスト 東京都千代田区丸の内三・四 新国際ビル810 電話 03-3214-2031 電信 03-3214-2033

自然と文化

1999 59

発行 一九九九年二月二十五日 編集・発行 財日本ナショナルトラスト

定価 600円 本体 570円 送料 30円



主は時、金をして、料観は帰る時、館

見世物

●執筆者……石井達朗・カルロス山崎・北村皆雄・川添裕・坂人尚文

●発行者……西村太吉・大野裕子・田村由三郎

●鼎談……山口昌男・木下直之・坂人尚文

●連載……山本宏子・勝木言一郎

神社の境内に突然見世物小屋が出現するのは、祭りの一週間ほど前である。当日、小屋の周りは露天商に囲まれ、客寄せの口上に惹かれ、人で埋まる。

次の日、すべてが跡形もなく消え、いつもの人気のない神社にもどる。現在、見世物小屋は二軒だけになった。

見世物小屋遊心人間ポンプ一座

北村皆雄

●見世物小屋って何●

私は最近、「見世物小屋」旅の芸人 人間ポンプ一座」という二時間のドキュメンタリー映像を完成させた。

特別深い理由があったわけではない。ふと見世物小屋というものが気になり撮ってみようと思いついた。一九九三年、私が撮影するとき、全国に四件の見世物小屋があった。友人で見世物小屋に詳しい上島敏昭さん、鶴飼正樹さんに相談すると、人間ポンプの安田里美さんがいだろうということになった。その安田さんは撮影の七カ月後に亡くなった。今年（一九九八年）の夏には、多田興行部の主宰者多田さんも亡くなったので、見世物小屋中心に興行できる場所は今では大寅（大寅興行社）さんのところと団子家さんのところの二つになってしまった。

見世物小屋の関係者も次々と亡くなってい

る。

私の撮影した身体障害者で小人の芸人ナミちゃんも一九九六年に亡くなった。丸太で小屋掛けする数少ない職人、秀義さんも九八年の五月に亡くなっている。私共は消えかかろうとする最後の光りを映像に収めることになったのだと思う。特に見世物小屋の最後の芸人といわれた人間ポンプの安田さんの芸を記録できたことは幸運であった。これほど美しく人を魅せる芸人はもう出現しないのではないか。安田さんの死で、見世物小屋の光りは一層小さくなった。

私は「見世物小屋」の映画を自分の会社で自主制作することにしたが、当初、テレビで出来るのではないかと思っていた。その方が予算的に楽になる。しかし、テレビ局担当者が躊躇した。というのも、見世物小屋には

身体障害者が出演しており、それをテレビで見せると、障害者を見せ物にして、世のへ良識ある視聴者から抗議の電話がくるのだという。ウの目タカ目でウォッチングし、電話をかけてくるそうした人たちは、身体障害者の立場に立ってもものを言っているのだろうか。それほど身体障害者のことを気にかけ、暖かいまなざしをそそいでいるのだろうか？

というより、そうした存在を視界の外に置きたい、見たくない、目の前から抹殺したいというのではないのだろうか。良識という殻を破った人の中には、身体障害者「可哀想、見世物」ケンカランという図式がキツチリとできあがっていて、それ以上に踏み込むことで探索しないのだ。

見世物小屋ってホントになんなのだろう？

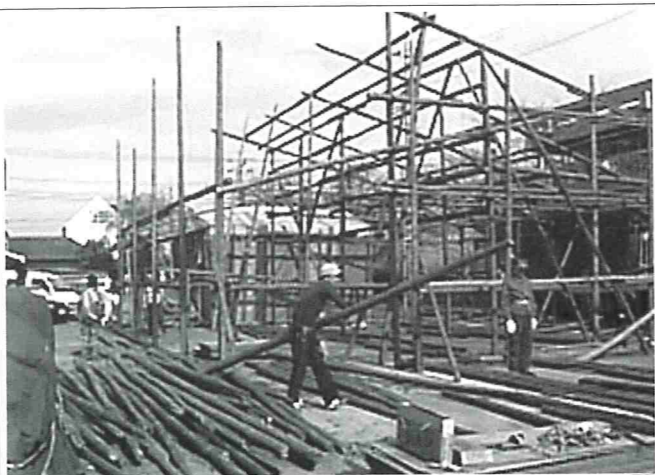
●一座のひとびと●

私が撮影したとき安田里美興行社の構成メンバーは総勢九人であった。ざっと素描して

みると、こんな人々である。

◆安田里美さん（七一歳）：一座の責任者、太

夫元。生まれた時アルビノ、いわゆる白子であったために、四歳の時に岐阜の興行主



上人間ポンプの絵看板
右 秩父の夜祭りで小屋掛けをする。左が安田里美さん



であった先代安田与七さんにもらい受けられた。親は養育費を付けて預けたと言いつ、先代は金を出して買ったと里美さんに語っている。今となってはどちらかは分からない。

◆春子さん(六二歳)：里美さんの妻。一二歳の時に長崎で被爆。その後、旅回りの一座に参加。今でも被爆者健康手帳を持っている。一座を切り盛りしている。

◆フクちゃん(六二歳)：知的障害者。集団就職で紡績工場に働いていたが、折檻を受け頭がおかしくなったという。ルンペンをし

●見世物小屋が救う●

かつてはどの見世物小屋も身体障害者を抱えており、異界のイメージを醸し出すのに一役買っていた。見世物小屋はそうした人たちの寄せ集まり場であった。

このような障害を持つ人たちを、世の中の誰が救いの手を差し延べてきたのだろうか。家族も地域も病院も、宗教の奇跡によっても救われなかった人たちが、食べるということ、生きていくということを自分の手でやろうとするとき、そこに見世物小屋があったのだ。見世物小屋が彼・彼女らを養い、生活の場とさせ、救ったのではないか。この一座の人々の生きざまをみると、そんな思いがしてくる。

こんな話を聞いた。フクちゃんのことだ。



ていたところを拾われ、見世物小屋でへたこ娘」として出演するようになった。

◆カズさん(六三歳)：知的障害者。やはりルンペンをしていたところを拾われた。生まれたとき土間に落とされ、頭を打ちおかしくなる。出産の折り母親は死亡。ビクバラシという首だけ人間になって、見世物小屋の外で客を寄せる役どころを担う。

◆秀義さん(六一歳)：小屋掛けの責任者。片足が悪い。丸太を組み仮設の見世物小屋を建てる技術は天下第一品である。

◆ナミちゃん(六三歳)：他の見世物小屋多田興行から借り受けられての出演。小人。下

だいが前のことだが、八月の三島神社の大祭に見世物小屋を張ったとき、春子さんはフクちゃんの家族、兄弟衆を呼んで会わせたことがあったという。二十何年ぶりに涙の再会を果たしたその折りに、ここから連れていくのなら連れてって下さいと伝えたが、結局は家族の誰も引き取らなかったという。もちろんそれぞれの人たちに事情というものがある。経済的な理由で面倒を看れないということもあったかもしれない。親戚や近所の目を意識し、蔑みや偏見にさらされることを避けたのかもかもしれない。六歳の知能指数というフクちゃんを、結局見世物小屋が引き取らざるを得なかったのである。こここそフクちゃんを居場所であり、活躍場所である。見世物小屋

ちゃんの芸を見て、胸が締め付けられるような辛い気持ちになっていたが、何度か話したり、芸を見ているうちにそうした気持ちもだんだん消えていった。舞台上「皿回し」やナミちゃん十八番の逆さ踊り「おてもやん」を踊った後、観客に爆雷の拍手を受け、本当にうれしそうに晴れ晴れと笑っている顔が、なんと美しいことかと思つた。誇らしく「この道一筋、三十年でございます」と観客に言い

上右カズさん(右)とナミちゃん(左) 上左フクちゃんにカッラの飾りをつける
左呼び込みをする春子さん(右)と奥にたこ娘のフクちゃん
下客が一人入るとソロソロ皆客が入る



半身に障害を持つ。ある時はヘイノシシ娘、ある所ではヘウシ娘の名で、四歳の時から見世物小屋を渡り歩く。牛やイノシシの足格好に似ていることからきているのである。今回は山鳥娘の名で出演する。

・その他、運転手兼小屋掛けと犬の演芸を担う春子さんの弟陸男(五二歳)さん、手品師の長崎さん(八一歳)、アイヌの血を引くという手伝いの文夫さん(五一歳)がいる。この三人は健康者である。

こうみると、一座の九人のうち六人までが身体どこかに障害を抱えた人たちである。

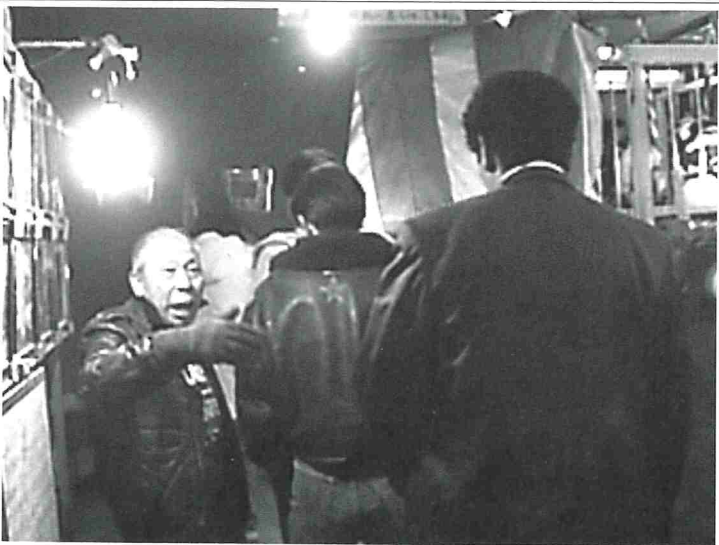
に通つて脇から見ていると、春子さんたちはよく面倒みているなあと思うし、フクちゃんも頑張っているなあと思わせる。

やはり六歳くらいの知能指数だというカズさんがいる。割合に裕福な家で育つたということだが、一度春子さんはカズさんを連れて訪ねて行ったことがあるという。兄弟が家に帰るかどうするか、くどいほど聞いても、見世物小屋の方がいいと一生懸命言い張り、付いて来たという。たとえ何不自由なく家族と生活できても、自分を必要としており、それによって気兼ねなくメシが食える場所がないと本能的にわかっているのではないだろうか。

私は、もう一人の身体障害者、小人のナミ

切っているのである。

障害を持つ人たちが、見られるという受け身の立場から、見せるという主体的な立場に転化させることで生き生きしている姿を、山鳥娘のナミちゃんのなかにみたく思った。売られ、買われて移る小屋、小屋で次々と太夫さんが亡くなることから、「太夫殺し」と噂をたてられたりして、辛い思いもしただろうが、やはりナミちゃんの六九歳の人生を、



見世物小屋が救っていたのではないだろうか。 棧敷を見ていると、どうも良識ぶったイン

テリ風だけが、拍手をしているのか、笑っちゃ あいけないんじゃないかと、あれこれ思案

にくれて戸惑っていた。

●見世物小屋の人寄せ術●

見世物小屋には独特の人寄せ・人掃け術がある。おどろおどろしい絵看板や人の好奇心をくすぐるタンカ・呼び込みが最たるものである。

見物人に最初に立ちほだかる「ヘツキダン」といわれる外側の幕は、腰をかめ頭を下げないと絵看板すら見えないようになっていて、そうしたのでぎさ込むような姿勢をとらせることで、人々の好奇心を一層あおるようになっていく。観客は中へ入るために「ヘクグリ」幕をくぐると、見世物小屋の空間が映画館や劇場と違って、いかに気づくであろう。入り口と出口が一続きになっており、棧敷といわれる立ち見の観客席も、その流れのなかに設定されているのである。舞台の演芸も入り口から出口方面に移りながらつぎつぎ演じられるのが通常で、いかに観客の回転をよくするかを工夫している。

ビクバラシ
小屋の前、目立つところに、首から下が見えないように鏡を使ったビクバラシの箱を置き、中にカズさんが入っている。ビクとは首を逆さにした隠語である。バラシはクビと胴がばらけて見えるところから命名されたのであろう。まるでさし首のようだ。この細工が不思議に思われて、人を寄せ集める

お化け屋敷と見世物小屋が並ぶ秩父の夜祭り

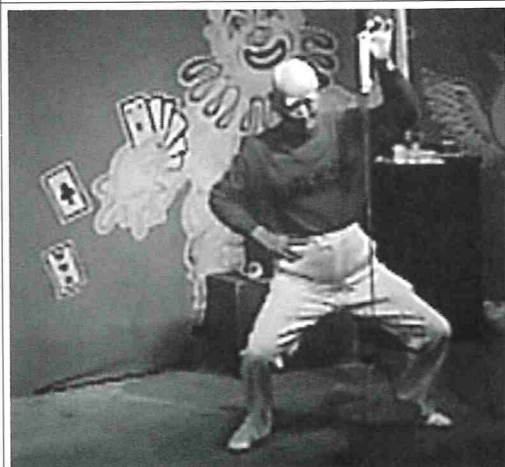


のであろう。
グラシ

薄いカーテンの向こう舞台側に組んだ格子檻の中に、着物姿、髪を島田結ったフクちゃん、背中を向けて座っている。これが「へたこ娘」である。フクちゃんの上には、美しい着物姿の妙齡な「へたこ娘」の絵看板が飾られ、着物の中から八本足が出ている。春子さんのタンカが客を引きつけ、たこ娘を演ずるフクちゃん、着物を脱がせ、上半身を裸にする。たこ娘のフクちゃんは、哀愁さそう古賀メロデーに操られるかのようにゆらゆら踊り、舞台の真ん中に向かうという春子さんのタンカで立ち上がり、すっと消えてしまう。実際には舞台に登場しないのである。外の客を引きつけるこの場所をグラシと呼んでいる。客が釣られて中に入ると舞台では全く別な演芸が行われているのである。安田さんの芸のように舞台での見せ物が魅力的だと、あつと舞台に引き込まれて、たこ娘のことなどすっかり忘れてしまう。しかし、舞台上が下手な芸人だと、たこ娘の所から動かず、呼び込みに騙されたら反感を買うことにもなってしまふ。言い逃れに「学理の結論 隠身法」と書かれた立て看板がフクちゃんの裸の前にひっそり置かれている。



上左 ナミチャンの皿まわしと逆さ踊り(上志) 左 火を噴く人間ポンプ、安田里美さん 下右 金魚を飲みこんだ後に、釣糸で金魚を釣る 下左 水の入ったバケツを半紙であげる気合術





微電流を安田里美さんに流す。電気人間の絵看板。70年まで活躍した

タンカ
見世物小屋は二回楽しめる。一つは呼び込み、タンカ。もう一つはもちろん実際の舞台である。春子さんの絵看板を指し示しながら

のタンカは、客をコマスの巧みである。たとえばグラシのたこ娘を使ってこのような泣きタンカで呼び込む。
「私は地位もある名誉もある、財産もある

べっぴんであるから、絶対このような子供は生まないのよと誰が皆さん断言できます。御婦人のお腹の中十月十日は飯の宿、オギヤアとこの世に産み落とすまでは、どのようなお子さん産まれてくるかはわかりません。ここにおりますこの姉妹ふた割れとて、同じ母親のお腹痛め、同じ皆さん一億万この世に生を受けながら、何ゆえかような姿の子供がほら、この世の中に産まれてくるのであろうか、医学や科学では絶対割り切ることができないのだよ、問題のこの姉妹でございます。はいそれではフクちゃん、支度ができましたら、その帯を解き着物を脱ぎ、全裸丸の裸でよおく見てもらいなさいよ。後ろ姿が皆さん髪形に何の変りがございますよう。頭には京都祇園は舞子のごとく、きれいな花かんざしを差し、顔には紅、白粉つけたこの娘が、今からお客さまの面前で、恥と外聞とをうち忘れたのか、それとも誰も恨むすべもなく、持って生まれた宿命と諦めたのか、この帯を解き着物を脱ぎ、全裸丸の裸になりますれば、この娘のこの腰から下、このものこの付け根のこのところ見ていただけます。はいそれではフクちゃん、支度ができましたら、その帯を解き着物を脱ぎ、全裸丸の裸でよおく見てもらいなさいよ。見ていただけますればこのお姉ちゃん、裸のまま立ち上がるんです。立ち上がるのにも、長いあんよもあればほら短いものもあるから、真直ぐ立ち上がることができないから、表からでも見えておりますこの二本の綱が頼りであります。この二本の綱に、

ほらしつかりと掴まりながら、まず体を大きく左右に振ります。体が左に大きく傾けば、右のあんよの、このモモの付け根のところ、右に身体が大きく傾けば、左のあんよの、このものこの付け根のこのところ見ていただけます。それでは嘘か真かフクちゃん、恥ずかしいでしょう、嫌でしょうがもう一回だけ、今からお客様の面前で今ここで、はいそれでは今からその帯解いた、はいそれではその着物を脱いだ(フクちゃん着物を脱ぐ) そうそうです。全裸丸の裸でよく見てもらいなさい」
客層に合わせ、短くしたり長くしたり、畳みかけたり、じっくり聞かせたりと、まさに呼び込みの巧さが客の数を決めるとい見世物世界の面白さがここにあり。さらにタンカは観客にたたみかけていく。
「火の車つくる大工はなけれども、己がつくりて己が乗りゆくのか、まこと現在のこの姿

から、ほら、早く入って見なさいよ！お金はね、全部見てから出る時に払って下さい。長いお時間かかりますよ。はい、どなたもはいどうぞ、どうぞ。前に廻ってはいよく見て下さい。見てあげるあなた方が後生ならば、見てもらうこの姉妹、その日その日の罪滅ぼしでございます。はいどなたもはいどうぞ。前に廻ってはいよく見てあげてください。情けは人のためならずや。回り回ってはいずれば我が身のためとやら、ほらほら、はいどなたもはいどうぞ、前に回ってはいよく見てあげてください。裸足裸のまままで、ほらのたりのたりと歩く容態、また一段とみものでございます。這えば立てよ、ほらみなさん立てば歩めの親心、よく寝ればみなさん寝るとのぞく枕ヶ谷、二十日の闇に迷わねども、子ゆえに迷わぬ親はございませんよ。はいどなたもはいどうぞ」
呼び込みのおもしろさに釣られ、よし入っ

てみようかと思うのだが、なんだか怖いような、後ろめたいような気がして躊躇している、誰か一人がすつと入る。よし、自分もと釣られてクグリ幕をくぐるのだがねそれにも実は仕掛けがあったのだ。
トハII サクラ
手の空いた者、小屋掛けが終わった秀義さんとか文夫さんなんかサクラになって先ず入るのだ。サクラのことをこの世界ではトハという。トハとは、ハトII 鳩の逆語である。ハトは一羽が動く他の仲間も釣られて一斉に動き出す習性をもつというが、見世物小屋のお客さんもそうだという。タンカに釣られるでしょうかと躊躇している時、一人が入ると、つい釣られて入ってしまうものだという。その呼び水になるサクラのことを、鳩にあやかってトハというのだそう。トハに釣られて棧敷入ると安田さんの名人芸に出くわすことになるのだ。

●虚実皮膜の間——安田さんの芸●

人体の驚異人間ポンプと称し、さまざまな物を口に入れ、胃袋に納め、ある物は加工し、ある物はそのまま吐き出すという芸を得意とした安田さんの芸は謎に満ちていて解らないことだらけである。白黒の碁石を飲み込み、客の要求に応じて自在に出し分けることがどうしてできるのか？金魚を飲み込んで、どうして釣り針でつりあげられるのか？一休金魚や碁石は本当に飲んでいるのか？その芸につい

ては五十年連れ添った奥さんの春子さんも分からないと言う。奥さんにも秘密を明かさずにあの世に持って行ってしまったのだ。いくつか想像できることもある。しかし、圧倒的に解らないことの方が多い。
私が何度も撮影したビデオを繰り返して見て、鎖を飲んだり、剃刀を飲み込んだり、ガソリンを飲み込み火を噴く荒技に対して、解ったことがほんの少しだけある。しかしそ

れについては明かさない方がよいように思う。安田さんの芸は、まさに虚実皮膜の間なのだ。私は、映画の中で締め括ったナレーションのように、見世物小屋は、芸を演ずる人たちの抱える生身の軀が、巧みな虚構に包まれている場所である、と思っていた。今も、先も。
..... 企キュメンクラー映像作家
◎31・36頁の絵看板は「オール見世物」から転載